ISSN 0918-1954

アルパック ニュースレター

山科駅前地区第一種市街地再開発事業により“ＲＡＣＴＯ山科”がオープンしました
出典：パンフレット（本文中に関連記事があります）

アルパック　ニュースレター　もくじ　　1998年11月1日

●ＲＡＣＴＯ山科がオープンしました …… 2
●コウノトリの舞う郷（さと）を目指して …… 4
●或る被災マンションの復興に向けて …… 6
●「白壁アカデミア」オープン …… 8
●コタグデーインドネシアのまちなみ保存運動 …… 9
●改革開放は今ー中国訪問、印象記 ……11
●21世紀の都市（まち）づくり三田国際会議と
　ライフデザイン市民フォーラムに参加して ……12
●「ガレリアかめおか」を見学して ……13
●「まちづくり交流フォーラム　研究集会」の紹介 ……14
●京都ミニゼミ『まちを活かす新しい動き』を開催します ……15
●アルパック　プラネット８号発行 ……15
●おおやふれあい市民農園農事通信№３ ……16
●新刊旧刊書評紹介 ……17
●まちかど ……18

NO.92

ＲＡＣＴＯ山科がオープンしました

松尾　高志

京都の東に新しいまちが誕生

京都市の東の玄関口である山科駅前地区に新しいまちが完成しました。９月19日に今回完成したビルの竣工式が、また10月３日にはまち全体のオープニングセレモニーが開催され、盛大に「まち開き」が行われました。

このまちは、京都市が施行する山科駅前地区第一種市街地再開発事業により整備されました。ＪＲ東海道本線・湖西線、京阪電鉄京津線、昨年開通した地下鉄東西線の各山科駅と山科地域のバス路線の結節点という交通の要衝であり、山科地域の中心地として古くから発展してきたこのまちにとって、駅前広場など公共施設整備や商店街の近代化の遅れは懸案事項で、再開発の実現は永い間の夢でした。そしてようやく今回まち開きにこぎ着けることができました。

洛東の楽都－「ＲＡＣＴＯ(ラクト)山科」

このまちの愛称は「ＲＡＣＴＯ(ラクト)山科」、「洛東」と「楽都」をかけあわせたネーミングです。５月に愛称を一般公募したところ、全国から 8,181点の応募があり、その中から親しみやすく、山科の歴史と立地をイメージできるという理由で選ばれました。またロゴマークも作成され、４棟の再開発ビルをモチーフとした形で、色調は京都を象徴した古代紫が用いられています。

オープンした４棟の複合機能ビル

この事業では約 2.8haの施行区域の中に、「ラクトＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」と名付けられた４棟の再開発ビルと道路や広場などの公共施設の整備が行われました。

ラクトＡ　駅前の交通広場に面する「ラクトＡ」のコンセプトは、人と人との交流とくつろぎを創造するターミナルコミュニティーゾーンです。１～８階の「ホテルブライトンシティ山科」は、ゆったりしたシングルルームを中心とした 100室の宿泊室と大小宴会場やレストランを備えたコミュニティホテルです。地下鉄を降りて改札の目の前のＢ１・Ｂ２階には地元商業者を中心に、様々な飲食・サービスを提供する専門店街「ラクトメトロモール」が構成されています。２階は、地元の歴史ある和風料亭「奴茶屋」となっています。

ラクトＢ　４棟のうち最も規模が大きい「ラクトＢ」は、カジュアルショッピングゾーンがコンセプトです。Ｂ１～４階には大型商業施設として、地域に密着した新郊外型百貨店「大丸やましな店」と、服飾、雑貨、食品、飲食などの専門店が揃った「専門店街ラクト」が入り、個性豊かなカジュアルライフを提案する情報発進拠点を目指しています。フロア中央部の４層の吹き抜け空間「アトリウム」には、パイプオルガンが設置され、また特殊な音響装置と38台のマルチスピーカーの自動演奏により臨場感あふれる立体音響を楽しむことができます（これだけの規模の演出は日本初だそうです）。５・６階の「ラクトスポーツプラザ」は京都市の施設で、25mの温水プールと、最新設備を備えたトレーニングジム、フィットネススタジオ、交流活動に使えるコミュニティホールを備えた健康・文化施設です。誰でも入場でき、２時間 900円（大人）でコミュニティホールを除く全施設が使えるという料金設定も魅力です。その他、Ｂ２・Ｂ３階には 364台の公共駐車場が、５～

９階には好評のうちに分譲を終えたマンション「メゾンウェスト」が併設されています。

ラクトＣ　「ラクトＣ」は、豊かな日常生活を提案するシティサービスゾーンです。１階の金融機関と店舗や、３階の医療施設など、快適で便利な日々の生活を提案する施設が揃っています。また２階の「京都市生涯学習総合センター山科」は、京都市生涯学習センター（京都アスニー、中京区）の初めての分館として整備されるもので、研修室、実習室、サークル活動室、会議室や和室などと、生涯学習情報プラザを備えており、様々な活動や学習に利用できる施設となっています。また４～９階は分譲マンション「メゾンイースト」となっています。

ラクトＤ　平成７年に一足早くオープンした「ラクトＤ」は、まちの賑わいを演出するアミューズメントゾーンです。１階のパチンコ店の他、２階以上には診療所やオフィスなどが入居しています。

快適で潤いある公共空間

「ラクト山科」に今回整備された公共施設は、３つの交通広場、幹線街路、区画街路、地下道、地下駐輪場などです（来年度には仮設店舗跡地に公園を整備します）。

街並み・まちづくり総合支援事業を活用して整備された広場・街路については、バリアフリーはもちろんのこと、グレードの高い都市空間づくりに向け、照明、サイン、舗装、植栽等に工夫をこらしています。また、街角のあちらこちらに京都市の芸術系大学の先生方が製作されたモニュメントと彫刻が設置されています。その他に地下道には山科の名所や史跡を紹介・案内する陶板レリーフや案内地図、壁に飾られた楽器のレリーフを触ると音楽を奏でる「山科シンフォニーウォール」などが整備されています。

なお、これらの再開発ビルと公共施設の管理は、第三セクターの山科駅前再開発(株)が行っています。

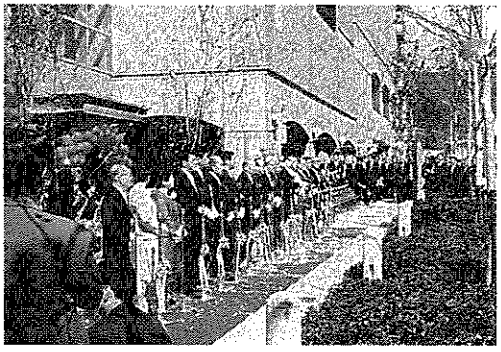
ラクト山科とアルパック

アルパックが初めてこのまちの再開発の構想づくりのお手伝いをさせてもらったのは、30年前の昭和43年でした。それからしばらく間が空いて、再度構想づくりに関わったのが昭和54年、その年からずっと継続して基本計画、公共施設計画、基本設計、事業計画、権利変換計画、管理運営計画、景観形成計画などのお手伝いをさせていただきました。事業推進は困難を極め、それだけに、今回のオープニングを迎えられたことは、感慨深いものがあります。関係権利者の方々と、施行者の京都市をはじめとする事業関係者の方々の努力と熱意の賜物と感じております。

好調な滑り出し

さて、３日のオープニングは、天候にも恵まれ、ラクトＢの商業施設を訪れた買物客は約５万人と、予想を超えた好調な滑り出しを見せています。しかし、厳しい経済情勢の中、この好調さを本物にしていくことが重要です。そのためには、再開発ビルだけではなく、周辺商店街や地域を含めたまちの魅力づくりの努力を続けていく必要があると思います。一度お越しいただき「ラクト山科」の忌憚のない「激励」をお願いします。

（京都事務所　まつお　たかし）



テープカット

コウノトリの舞う郷を目指して

有機農業やビオトープづくり

重本　幸彦

間もなく始まるコウノトリ野生復帰作戦

国の特別天然記念物で国際的にも「絶滅危惧種」などにされているニホンコウノトリ（日本鸛。図１）を野生に戻す取り組みが、兵庫県豊岡市で県と市との協力で進んでいる。

コウノトリは、昭和46年（1971）に最後の１羽が人工飼育のため捕獲され日本の野外から姿を消していた。しかし、最後の生息地である豊岡での長年の保護・増殖の努力がロシアからの若鳥の導入などもあって実を結び、現在、約60羽にまで回復。その成果を受け、豊岡市内の丘陵165haでコウノトリの野生復帰の基地となる「コウノトリの郷公園（仮称）」が建設中で、来秋に一部オープンの予定。コウノトリの飼育と野生復帰へのトレーニングの場や研究所、並びに野生復帰やその生息環境づくりの意義やノウハウなどを啓発・普及するコウノトリ文化館などが活動を始める。

図１：ニホンコウノトリ（豊岡市教育委員会資料）

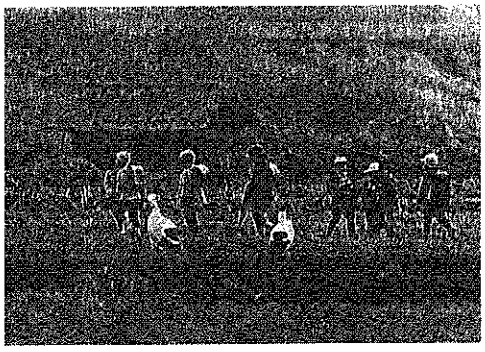


図２：登校する子供たちを見守るコウノトリ
（写真：高形信雄氏。豊岡付近で戦後に撮影されたとみられる）

この間まで共に暮らす仲間だった

江戸時代、大型の鳥は鷹狩りの獲物などとして保護されていたが、明治に入ると乱獲された。コウノトリもほとんど亡んだ。

しかし、豊岡地方では、少し前まで野生コウノトリが人々と共に暮らしていた（図２）。

水辺での餌動物の激減とその原因

こうした記憶を持つ地域の人々に支えられコウノトリの野生復帰作戦が始まろうとしているが、その前には「野外での餌不足」という大きな課題が横たわっている。この問題を中心に現地の方々に色々教えていただきながら、調査と対策案の検討を行った。

今なお、県下有数の広大な水田と長大な農業用水路網が残る豊岡地方だが、かつては泥田の中に鮒・蛙・どじょうなどのコウノトリの餌動物が豊富にいた。しかし、今の水田地帯ではその姿はほとんど見られない。もちろん、餌となる生き物がすむ自然河川なども残るが、十分でない。

では、なぜこれらの餌動物が水田地帯からいなくなったのだろうか。

まず、農薬や除草剤の影響が考えられるためコウノトリの野生復帰へ向け、農家により農薬を使わない有機農法やアイガモ（合鴨）農法の取り組みが広がりつつある。

しかし、環境ホルモンやダイオキシンなどの問題は残るものの、一般的には今の農薬には以前ほどの強い（急性）毒性はない。そのため別の原因も考えざるを得ないが、そこでクローズ・アップされるのが、コウノトリの

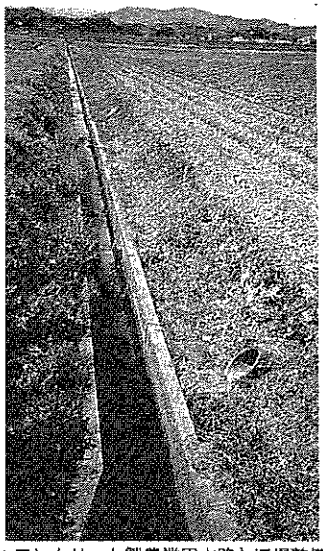


図3：コンクリート製農業用水路とほ場整備済み水田からの排水口（右側）。排水口と排水路水面とが大きく乖離。魚が産卵のためさかのぼるのは無理。豊岡市内で。

餌動物の繁殖や生息の場である水田・水路・河川など水辺の人工化だ。

水田のほ場整備により、自然の水路（小川）は、生き物が横断や生息しにくい垂直の3面張りコンクリート水路になった。また、以前はほぼ水平だった水田と水路との間に、乾田化のための盛り土により数十cmの段差が生じ、さらに水路にも段差ができ魚が流れをさかのぼり産卵地である水田に入れなくなった（図3）。こうして、蛙や魚などが水田地帯などから姿を消していったとみられる。

有機農業とビオトープづくりとが“鍵”

コウノトリの野生復帰には、無農薬の有機農業などの普及とともに、ほ場整備がほぼ完了している水田と水路、さらには人工的な河川などを、生き物の生息にやさしい水辺に改良することが望まれる。いわば、生き物のための水辺の“バリアフリー”である。

しかし、ほ場整備済みの水田地帯や改修済み河川を、自然性を豊かにするためとはいえ今さら大幅改良するのは容易でない。そこで求められるのが、「修復的多自然化工法」など現実的な技術の研究開発である。

例えば、コンクリート水路について、“蛙のための小橋”や段差への“小魚道”の設置、部分拡幅などにより流速をゆるめ土砂や藻のある“水溜まり＝魚のお家”などを所々に設ける、あるいは、改修済み河川の高水敷きのウエットランド（湿地）化などだ（図4）。

さらに、稲刈り後の田んぼに翌春まで水を張ることや、里山管理により松枯れを防ぎコウノトリが営巣場所として好む赤松の大木を確保するなどのソフト面での対応も望まれる。

当面は、人工的な餌場や人工巣塔づくりが課題であるが、将来、多数の野生コウノトリが留鳥として生息するためには、水田地帯や里山一帯で、様々な工夫により面的広がりを持ったビオトープ（生き物の生息の場）づくりを進めることが欠かせない。

そして、これらは農家をはじめ人々の理解と協力なしには進まない性格のものである。

“コウノトリの舞う郷”へ高まる期待

今、コウノトリの野生復帰への期待が高まっている。それは、人々が“コウノトリの野生復帰”という新しい視点の国際性のあるプロジェクトに、時代の大きな変わり目を象徴する何かを感じるからではないかと思われる。

そして“コウノトリの舞う郷”を目指す取り組みは、結局の所、この地方を自然環境の面だけでなく人間社会の面でも、生き生きとさせるのではないかと期待される。

（大阪事務所　しげもと　さちひこ）

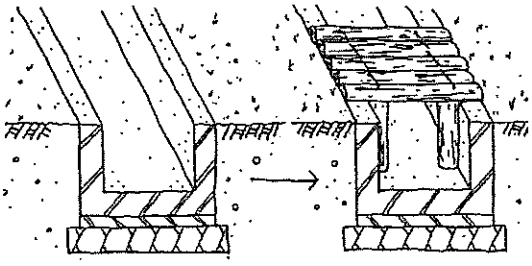


図4：蛙のための小橋
（修復的多自然化工法の例：アルパック作成資料から）

或る被災マンションの復興に向けて

中塚　一

震災復興は未だ終わらない

阪神・淡路大震災から、早３年10ヶ月が経過しました。アルパックでは、様々な段階・立場・場面で、震災復興に向けて微力ながら支援をさせていただいております。その一つに被災マンション復興支援があります。

震災は、兵庫県下約 5,300棟といわれる分譲マンションにも多大な被害をもたらしました。新聞などでは「99％は再建のメドがついた」とされており「残り１％には区分所有法の抱える問題点が凝縮されている」と報道されています。私どもが支援させていただいているＨマンションは、その後者に属し、不幸にも「建替え決議無効確認請求」の訴えがなされ、現在、公判途中です。

被災後の取組と対立の深まり

住戸90戸と公共施設との合築で、築後約30年を経過しているＨマンションへのアルパックの支援は、被災後約１年を経た平成８年４月にさかのぼります。

被災直後、管理組合が中心となって現建物の施工会社や直後に相談を受けたコンサルタントの協力を得て、復興に向けた話し合いが進められ、平成７年10月に「建替え方針」が決議されておりました。しかし、手続きや強引な建替え誘導などを理由に、補修を希望される方々との対立が深まっていました。

事態を改善の方向を探るため管理組合が“こうべすまい・まちづくり人材センター”にコンサルタントの変更を相談され、アルパックが復興支援のために派遣されることとなりました。

損傷状況調査と建替え案・補修案の検討

「建替え」か「補修」かを決定するのに、まず、建物の損傷状況を確実に把握する必要を指摘し、管理組合の臨時総会で、構造診断調査を専門機関に依頼することを決議し、調査を行いました。併行して、毎週土曜日の復興理事会やアンケート調査で、住民の方々の状況、復興方法の意向、抵当権の状況や資金調達の目途などを把握しながら、建替え案と補修案とを再度並行し煮詰めていきました。

建替え案では、現建物が容積率オーバーによる既存不適格であるため「総合設計制度」や「震災復興総合設計制度」を活用した建築計画案、概算資金計画、住宅金融公庫を利用した際の返済額試算、抵当権の抹消などを検討していきました。特に、高齢者の方が多かったので「高齢者向け不動産処分型特別融資」活用の可能性や公庫の融資相談会、仮設住宅や民間賃貸住宅家賃負担軽減制度などを活用した仮住まいの確保、建設費以外の諸費用などについても検討を深めました。

補修案では、構造診断調査により適正な補修や補強を行えば復旧できることを確認し、「共用部の補修概算費用」、築後約30年間一度も設備関連の修繕が行われていなかったため「機械設備等の大規模修繕のための費用」、被災程度別の「専用部分のモデル補修費用」を検討しました。また、住宅金融公庫を活用した場合の返済額の試算、補修後の中期保守計画、補修でのバリアフリー対策などについても検討を深めました。

以上の検討結果を、復興理事会、復興ニュースなどで情報提供しながら、全体集会で、

両案の「メリット・デメリット」、合意形成に向けた「しがらみ表」、正確な情報を共有するための「間違い正し」などを行いながら、出来る限り全員参加により、対立する意見の相互認識と相互理解に最大努力しました。

建替え方針の決定

復興方針の決定に向けて、法的根拠を明確にするため、弁護士会･不動産鑑定協会･税理士会･建築家協会･司法書士連合会等で構成する「阪神・淡路まちづくり支援機構」より紹介していただいた不動産鑑定士に、管理組合が鑑定を依頼し「２分の１を越える滅失」が判定されました。さらに、方針決定及び合意形成に向けた進め方(ルールづくり)、融資相談による資金調達の再確認、このままいけばどうなるのか等を検討し、各々の権利者の判断材料としていただきました。そして、平成９年４月管理組合の臨時総会にて「建替え方針の決定」が、４／５以上の賛成で決議されました。

建替え決議に向けて

建替え方針の決定を受け、区分所有法にもとづく「建替え決議」に向け、建替え決議の４項目（再建建物の設計の概要、費用の概算額、費用の分担に関する事項、区分所有権の帰属に関する事項）を検討するとともに、抵当権抹消の金融機関との個別協議、近隣への説明、施工会社数社の概算見積提出、司法書士の協力による各種登記手続き（相続等）などを進めていきました。この間にも復興理事会を中心に反対者との話し合いが試みられましたが、成果を得ることが出来ませんでした。

震災マンションの復興と通常の再開発との大きな違いは「時間との戦い」です。住めない人がおり、仮住まいとの長期の二重生活、公費解体等の特例の打ち切りなど、管理組合として最終の決断を下す時期との判断により、平成10年９月臨時総会を行い「建替え決議」が４／５以上の賛成で可決されました。

建替え決議以降の取り組み

しかし、残念なことに「建替え決議」から２週間後、反対者の一部から「建替え決議無効確認請求」が提訴されました。

一方、賛成者及び決議時点では反対で催告により参加された方々で再建組合が設立されました。再建組合では、現段階ではデベロッパー等の資金的協力が得られないため、転出者の所有権買取り費用、裁判関連費用等のための「再建基金」設立の必要に迫られましたが、再建組合理事会の努力と全員の一致団結により予定していた基金総額１億円を確保することが出来ました。その後、弁護士、司法書士や不動産鑑定士等の協力を得ながら法的な手続きが進められています。

何が課題であったのか

被災マンションの復興に関する課題については、「区分所有の未成熟」「区分所有法の不備（特に、費用の過分性、売渡請求の時価等）」「補修に対する技術や理論の未整備及び公的支援の不備」「建替え及び補修に関する適正な情報提供」「意見調整と合意形成に対する専門家の適切早期の支援」「損傷度・老朽度に関する第３者機関と費用助成」「通常時の管理組合における自主的な管理運営・組織連帯の意識」などが上げられます。

特に「初期段階の適切な状況把握、公正な判断手順の指導、正確な情報の周知徹底」が合意形成とそれに要する時間に多大な影響を与えること。さらに「対立する意見に対して感情的にならず、相互に相手の意見を理解し、話し合いの結果、決定した事柄には全員が従う」ための方法やルール「文化」づくりを、専門家を含め住民・地域組織が学習、構築していく必要があると痛感しております。

（大阪事務所　なかつか　はじめ）

「白壁アカデミア」オープン

名古屋都心の隣に新しい知の創造拠点

安藤　謙

10月17日に名古屋都心の隣接地である白壁地区に「白壁アカデミア」がオープンしました。今回は、当初の頃から参加してきた「白壁アカデミア」について近況をご報告します。

白壁アカデミアは、市民がつくる市民塾として、「市民大学院」のレベルを目標とした新しい知の創造拠点をめざしているものです。

白壁地区というのは、名古屋都心の北東、名古屋城の東にあり、江戸時代には中級武士の武家屋敷でした。明治以降には日本の発明王といわれた豊田佐吉をはじめ関係の方々や日本の女優第１号の川上貞奴、陶磁器卸商など名古屋の近代を支えた人たちが住んだ所です。戦後には、これら邸宅のいくつかが企業の厚生施設などになりました。現在でも 500 坪前後の敷地を持つ和洋折衷の近代建築住宅や料亭などが残る地区となっており、名古屋市の町並み保存地区に指定されています。周辺には古くからの学校も多く、都心に隣接した閑静な文教・住宅地区としてのイメージを持っています。

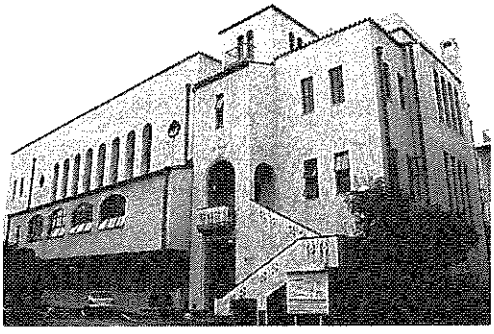
しかし、最近では建物の老朽化や相続税の問題などによりマンション化が進んでいます。特にここ数年の間に、この地区の近代建築が取り壊しやマンション化される計画が出てきており、街並み保存や近代建築の保存の面では大きな転換点に立たされています。

これまで、名古屋市内でも近代の土木・建築遺産を保存し、活用していこうということは進められてきました。また、街並み保存地区として、個人や企業の所有する建物を文化財として保存してきています。しかし、文化財の指定には至らないような住宅などは、保存の道がなかなか開けてきていません。

一方、大学は最近の少子化の動向に対して強い危機感を持っており、郊外の要塞化したキャンパスでの教育だけでなく、社会人教育や産学連携などを求めて、都心にサテライト大学院などを設置する動きが出てきています。都市のサイドからも、都心には知的創造拠点や知的インフラが必要ではないかという視点から知的交流サロンを望む声がありました。

これらの動きが重なり合った中で、街並み保存のために近代建築を活用し、知的創造拠点をつくろうとしたのが白壁アカデミアの始まりでした。

当初の平成９年頃は、大学関係者と行政、まちづくりコンサルタントなどが集まり、何をどのようにしてやろうかと夜毎の会合を開き、その輪を地元などに広げていきました。



設立記念講座&記念シンポジウムが開催された金城栄光館

自主的な保存活用を行う加藤邸（自習舎）

そこでは、かつての江戸の私塾のように、先生・生徒という関係ではなく、互いが膝突き合わせ教え学びあう場をめざしました。また、カルチャースクールや単なる知識を学びあうのではない、頭と手と心の知を探求する専門性のある大学院をめざしました。さらに、知の探求が与えられたものではなく、自らがテーマを設定し学び教えることができる市民による市民のための市民塾をめざしました。

このような経過を経て、一人ひとりが市民として参加し、白壁アカデミアをつくったのです。白壁アカデミアのめざすところは、①社会人と大学人の共同で、②講師も塾生も共に育つ場として、③頭・手・心の統合による、④平成の義塾（市民立の学校）を市民の手でつくり上げ、⑤キャンパスはまちなみ保存地区・白壁とした「知縁と共育」の場を市民の手によってつくり上げることです。

カリキュラムは、21世紀の知をテーマにした公開リレー講座と市民大学院としての研究講座、まちなみ保存について考える白壁の歴史と未来研究会の３つからなります。

10月17日の設立記念講座＆記念シンポジウムでは、前名古屋大学総長で愛知県芸術文化センター総長の加藤延夫先生が「真の知性とはいかなるものか」として基調講演を行い、谷岡郁子中京女子大学学長をコーディネータに小栗宏次愛知県立大学教授、舞踏家の中尾貴子さん、伊藤晴彦ＡＴデザイン代表がパネリストとして、「知の効用と快」“遊びと学びと人生と”をテーマに行われました。台風の接近する雨の中、 170人ほどの方が集まって下さいました。

白壁アカデミアでは、10月末以降に始まる研究講座の塾生や知恵・行動・財政のボランティアである塾友、賛助会員を募集しておりますので、興味のある方はふるってご参加下さい。

（名古屋事務所　あんどう　けん）

きんきょう　近況　きんきょう　近況　きんきょう　近況　きんきょう　近況　きんきょう　近況

コタグデーインドネシアのまちなみ保存運動

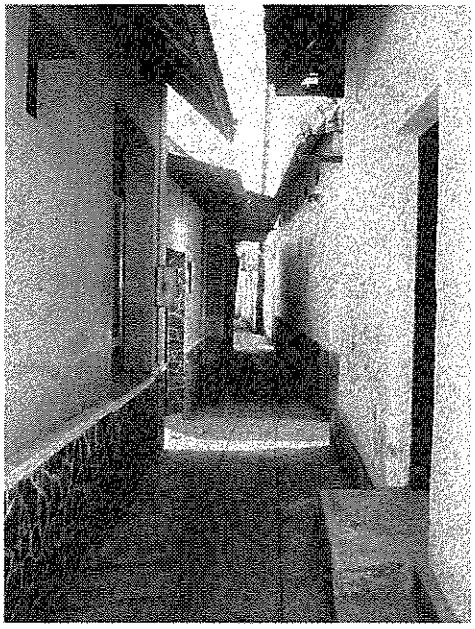
堀口　浩司

都市環境デザイン会議・関西グループ（ＪＵＤＩ）とガジャマダ大学（インドネシア）共催によるセミナーに参加しました。その一部を紹介します。今回のセミナーでは、ジャワ島の中央部ジョグジャカルタとバリ島の農山村が主な訪問地です。

ジョグジャカルタの市街地は、16世紀以降、王朝、オランダ植民地時代を経て、変化してきています。今回のセミナーは、早朝から市内のいくつかの地区を踏査した後、夜はコタグデ（Kota Gede）という一種の伝建地区でインドネシア風レセプションがあり、次の日は早朝から夕方まで、日本・インドネシアの双方からプレゼンテーションと意見交換をおこ

コタグデの街並み

庭先の路地空間：長屋の路地のような共用空間



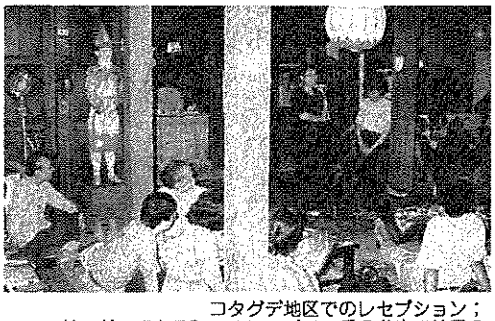
道路（ガング）空間；道路沿いは
3ｍ程度の壁によって閉鎖的な通りとなっている

なうという激しいセッティングでした。主要な論点は、近代的な開発トレンドの中で、歴史的な環境や景観をどう守って行くかという古くてあたらしいテーマに収斂しました。

セミナーでは、日本側からは中山道や奈良の事例を紹介しつつ、戦後の急激な高度経済成長と工業化社会の進展する中で、街並み保存、ナショナルトラストなどの市民活動が展開され、公共側でも建設省のＨＯＰＥ計画など建築・住宅政策へとつながってきたことが紹介されました。一方インドネシア側からは、ジョグジャカルタの市街地形成の歴史や、それぞれの時代における都市・集落（概念的な違いはないという説もあります）の構造的特徴などの紹介があり、近代化の中で、どうやって保存して行くかといったプログラムについて説明がありました。このコタグデ地区全体を国民的な文化遺産として、物的、空間的に保存する活動を展開していました。多言語、多民族のインドネシアにおいて、イスラム的な生活様式やアイデンティティを残しながら、グローバルな近代化の流れにどう追随してゆくかということが大きな検討テーマだと感じました。

明治以来、キリスト教的近代社会の一員たるべく、イギリス化やアメリカ化を目標とした、我が国の近代化（西洋化）モデルの長短を再評価する必要を強く感じたセッションでした。

セミナー全体の紹介は、いずれＪＵＤＩのホームページなどに掲載されるでしょうから、詳細はそちらを参照してください。またバリ・ジャワの集落構造については「神々と生きる村・王宮の都市」（鳴海邦碩、田原直樹、



コタグデ地区でのレセプション；
リーダーであるDr. ハレスズベェ氏のお宅で地区の
住民との交流会

近所の方の手料理の紹介
なぜか食事前に甘いものを食べる

アルディ・P・パリミン　共著）を参考にしました。

（大阪事務所　ほりぐち　こうじ）

改革開放は今ー中国訪問、印象記

高田　剛司

去年に引き続き、今年も８月29日から９月４日の１週間、(社)日本都市計画学会関西支部の国際交流委員会による視察団（団長：鳴海邦碩・大阪大学教授）に参加しました。今回は、改革開放路線を進め、経済発展の著しい中国南部の都市（厦門(アモイ)、泉州、広州）と、今年７月に中国返還一周年を迎えた香港を訪問しました。

私の中国訪問は、２年半前に上海、杭州、蘇州を旅して以来でしたが、実際に訪れてみて、特に印象に残った３点をご紹介します。

まず１点目は、高層マンションの建設戸数が非常に多い点です（写真１）。香港はともかく、厦門、泉州、広州でも数多く目にしましたが、建設途中の物件が多く、完成しているマンションも果たして実際に居住しているのか、生活臭がほとんど感じられませんでした。現在の中国は、「社会主義市場経済」を導入しており、門外漢の私にはその仕組みがわかりにくく、人々がどのように住宅を取得するのか、所得階層はどうなっているのか、華僑の役割はどうなっているのかなど、帰国後の宿題が山ほど残りました。

２点目は、マクドナルドの多さです。日本では、主な駅前には必ずある、というくらい数多く出店されていますが、中国でも訪れた都市では、街中を歩いているとよくマクドナルドを見かけました（写真２）。確か10年ほど前に、「はじめて北京にマクドナルドが出店」というニュースが伝えられたと思いますが、中国の子どもも今や、大好きな食べ物はハンバーガーのようです。中国における食文化も、グローバル化が進んでいることを実感しました。

３点目は、今年の７月６日に開港した香港のチェク・ラップ・コック新空港についてです。開港からなにかとトラブル続きで話題となっていますが、関西国際空港に比べてコンパクトさにやや欠けるかなといった感がありました。出国審査ゲートから出発ゲートまでの距離がかなりあり、動く歩道はありましたが、ずいぶんと長く歩いた（歩かされた）感

写真１：再開発による高層マンションの建設（広州）

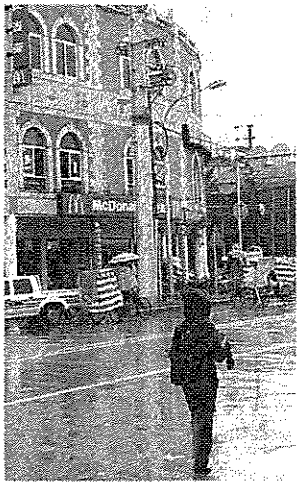


写真２：「麦当劳」＝マクドナルド（泉州）

写真３：チェク・ラップ・コック新空港の搭乗ゲート（香港）

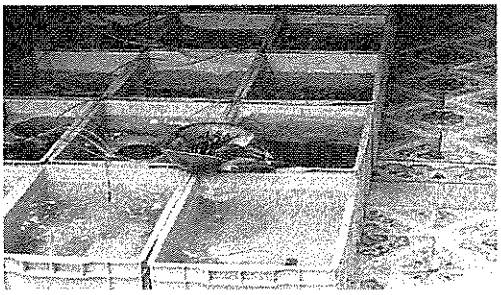


写真４：日本では天然記念物のカブトガニも
中国では食材に（厦門）

じがしました（たまたま出発ゲートが遠い所であったこともありますが）（写真３）。

総じて今回の訪問では、香港よりも中国本土の都市に勢いを感じ、かつ大規模な開発が進んでいる、という印象を持ちました。

最後に蛇足ですが、コロンス島のレストランでは、よくカブトガニを見かけました（写真４）。残念ながら食す機会を持てませんでしたが、次回その機会があれば、ぜひ「うまいもの（？）通信」に投稿したいと思います。

（大阪事務所　たかだ　たけし）

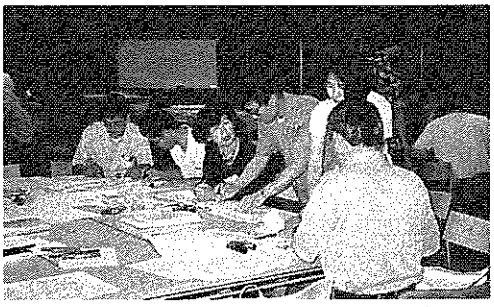
21世紀の都市（まち）づくり三田国際会議とライフデザイン市民フォーラムに参加して

岡本　壮平

７月11・12日、兵庫県立人と自然の博物館にて「21世紀の都市（まち）づくり三田国際会議」が開催されました。この会議では、「明日の都市づくりパラダイム」を総合テーマに、「育むコミュニティと環境」及び「世界的広がりの中での都市の機能と個性」をテーマとする２つの分科会で将来のまちづくりの方向性が議論されました。そして、これまでのような成長を基調とする方向から、地域に根ざし、コミュニティを重視した、環境と共生する、豊かで活気のあるまちづくりを目指す「21世紀のまちづくり宣言」が出されました。

この会議の中で、まちづくり事例の一つとして「三田市民フォーラム」の成果が報告されました。これは、国際会議に先立って三田市で行われた市民参加によるフォーラムで、三田市民の中から希望者を募り、生活の視点から20年後の三田のあり方を考えるというワークショップです。市民37名、市の若手職員６名、支援プランナー19名が集まって２ヶ月間で４回のワークショップを行いました。

私がお手伝いしたチームでは、「一人一人がライフデザイン」をテーマに、各自が理想の三田を思い浮かべ、「そのために自分ができること」を考え、実際に取り組んでみました。例えば、Ａさんは「新住民と旧住民が交流・融和できるまち」という理想像を考え、そのために自分が出来ることとして、実際に農村部に出向いて意見交換をされました。その結果、新旧の双方が互いに関心を持っていることやニュータウンも農村も高齢者がまちを守っていて高齢者同士の交流が重要であることなどを発見されました。



ワークショップ風景：
一人一人がライフデザインに取り組みました

単に意見を出し合うだけでなく、実際に取り組んでみたことで、それまで知らなかったことを発見したようです。フォーラム終了時には「自分が出来ることを少しずつでも実践することが自分自身のライフデザインの始まりなんですね」と笑顔で話して下さいました。「人がいて街がある、人が変われば街も変わる」という可能性を垣間見ることができました。住民参加の意義もそういう所にあるように思います。

（大阪事務所　おかもと　そうへい）

「ガレリアかめおか」を見学して

廣部　出

亀岡市は現在人口約9.6万人、京都市に隣接する、山々に囲まれた田園風景が美しいまちであり、また、尊氏、光秀、梅岩など、時代の転換を促した諸人物ゆかりの土地です。因みに、私は小学校２年生の秋まで亀岡に暮らし、そのご縁もあってか、現在、亀岡市の新しい総合計画策定のお手伝いをさせて頂いておりますが、歴史は必ずしも繰り返しません。

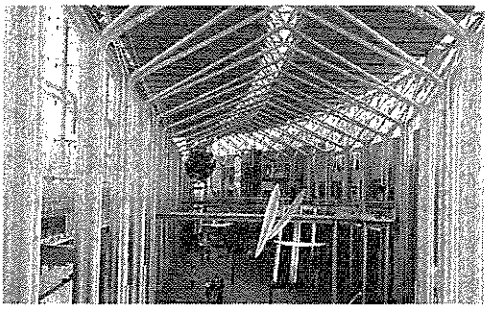
とまれ、同市は昭和63年に関西では初めて「生涯学習都市」を宣言、以来、市民の生涯学習需要を押し広げ、支えていく仕組みづくりを進めておりその一環として、去る９月５日、新しい亀岡市のまちづくりの契機となる施設が誕生しました。

「ガレリアかめおか」。市の中央生涯学習センターとして池原義郎氏の設計で建設されたユニークな外観の施設で、「道の駅」にも認定されており賑わいを見せています。生涯学習センターとしてこれほど多機能・大規模なものは他に例もなく、生涯学習をまちづくりの中心に位置づける亀岡市の姿勢が窺えます。

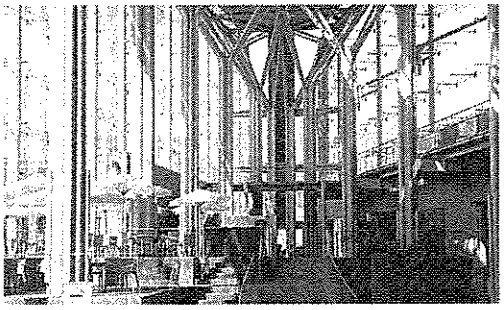
まず中に入って、一際目をひくのがガラスとトラス※で構成された三日月形のロビーギャラリーです。ここはそのままイベント・スペースとしての多目的な活用が考えられている明るく開放的な大空間。浮かんでいる直径3.9ｍの大地球儀は、亀岡市から息吹く生涯学習活動が地球規模で拡がっていくように、との願いが込められているそうです。星形屋根のコンベンションホールは1,500人も入れる大ホール、１階レベルの和風庭園はそのまま屋上に続いてハーブガーデンに...等々、建築物としても表情豊か。色使いや各種設備にも細かい配慮が感じられます。

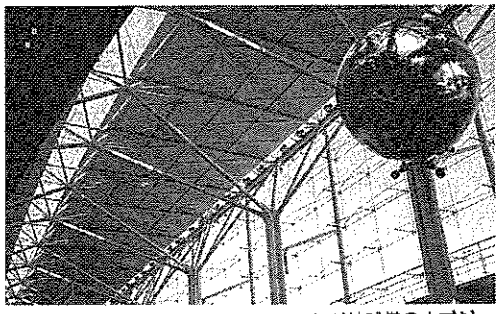
さて諸室を巡りますと、生涯学習はナンでもあり。パソコンが並んだ梅岩塾、陶芸・工作・料理実習・創作の４室からなる工房に市民サロン、合計６室もの研修室に企画展示室、その他に宴会・結婚式もＯＫな大広間、チャペルだってあります。図書室＆こども図書室はＡＶ機能がかなり充実していて、２室をつ

庭園側：対面の山が映り込む、
すぐ目の前の川にはカワセミが。



ロビーギャラリーを２Ｆから


明るい喫茶スペース：ちょうど三日月の片端です


これが地球儀のオブジェ

なぐ通路の窓際にはリッチなＡＶブースも。

機能面での大きな特徴のひとつが、在宅福祉サービスの中核施設としてのエイジレスセンターを併設していること。ここはホームヘルプにデイサービス、在宅介護支援、機能訓練などを担っているだけでなく、託児室とプレイルームや大浴場（日だまりの休憩室付き）もあって、市の全世代交流の拠点ともなっています。

その他にも物産市場やゲートボール場、イベント広場など、まさに盛り沢山。それに、年内はオープニング･イベントが目白押しとなっております。せっかくですので、お運びの際には、スケジュールなどご確認の程を。

（京都事務所　ひろべ　いずる）

※：部材が三角形を単位とした構造骨組みの一つ。部材の節点がすべてピン接合となっている。

「まちづくり交流ﾌｫｰﾗﾑ 研究集会」の紹介 -21世紀への市民からのﾒｯｾｰｼﾞ-

福井　秀樹

高齢化・低成長社会の２１世紀を迎えるにあたり、これまでの高度成長時代のまちづくりから大きくパラダイムを転換することが求められています。“まちづくり”を都市工学や建築・土木などのハード面だけでなく、環境・福祉・教育・文化といったソフト面からとらえる試みや、社会的マイノリティといわれる高齢者・女性・子ども・障害者・外国人などがかかえる課題を積極的に受けとめた試みなどが各地で行われていますが、新たな文化、新たなコミュニティの創造に向けて、これらの試みの交流を図ることが大切ではないでしょうか。

「まちづくり交流フォーラム」（以下フォーラム）は、このような理念のもとに活動している団体です。アルパック名古屋事務所では、フォーラムと出合い、その趣旨に賛同し、会議スペースの提供、企画への参加など事務局活動をサポートしております。フォーラムの具体的な活動内容は、愛知・岐阜・三重の東海三県をはじめ、全国でまちづくりに取り組む様々な人たちを中心に、研究者、行政、企業関係者、学生、一般市民などが参加するオープンな研究集会の開催を軸としています。研究集会は三年計画で開催し、初年度の今年は、「出合い」、次年度は「ディスカッション」、最終年度は「提言」をコンセプトとしています。この研究集会を終えると、フォーラムは解散します。さて、このような大規模な集会は、この地方では初めてに近い取り組みだけに、ネットワークの形成など、各種試みの活性化が期待されます。以下に1998研究集会の概要を記します。コンセプトは「出合い」です。11ものテーマの分科会を設け、様々な事例報告や各地でご活躍の方々に多数参加して頂きますので、ご期待下さい。詳しくは事務局まで。

1998研究集会プログラムの概要

日時：11月29日（日）10：00～17：00
場所：名古屋市公会堂ほか
タイムテーブル：
第１部（10：00～12：00）
○基調報告「今まちづくりとは」（中田實 まちづくり交流フォーラム代表）
○特別報告「市民が作る復興計画－阪神淡路大震災の教訓」（今田忠阪神淡路コミュニティ基金代表）
昼食交流会（12：00～13：30）
第２部（13：30～17：00）分科会
＜まちづくり交流フォーラム 事務局連絡先＞
052(238)1600
（名古屋事務所　ふくい　ひでき）

全国町並みゼミ　京都ミニゼミ『まちを活かす新しい動き』を開催します

全国で町並み保存に取り組む自治体関係者、研究者、住民組織が集まり、町並み保存問題を中心に情報交換している「全国町並み保存連盟」、「全国町並み保存連盟関西ブロック」の主催で、京都ミニゼミ『まちを活かす新しい動き』が開催されます。開催内容は次のとおりです。詳細については事務局まで。

開催日時：10年11月14日（土）
場所：元龍池（たついけ）小学校　講堂
京都市中京区両替町通押小路下る金吹町452（地下鉄「烏丸御池駅」から徒歩１分）
報告団体：
○(社)奈良まちづくりセンター
○あいの会「松坂」
○西陣活性化実顕地をつくる会
ゼミ概要：３団体の先進的な取り組み報告後、ワークショップ方式で会場を巻き込んで意見交換を行います。
参加費用：1,000円
＜事務局・問い合わせ先＞
京都事務所　石本　幸良

アルパック　プラネット８号発行
プラネット編集委員会

アルパックの技術情報交流誌『アルパックプラネット８号』を発行いたしました。今回の特集テーマは「福祉とまちづくり」です。

2000年４月から介護保険制度が発足します。その時点で国民の約60％が被保険者（40歳以上）となります。読者の皆さんにも介護保険制度は無縁のものではなく、将来の生活の質を担保するものといえるでしょう。そこで、現場で介護サービスを提供している坪山孝氏（るうてるホーム総合施設長）にお話を伺いました。その他掲載内容は次のとおりです。

現場から見た 介護保険時代の地域福祉
都市近郊農村のマーケティング戦略
まちづくり活動とワークショップの活用
農業農村整備のパラダイム転換
密集市街地整備の新たな方向
交流拠点の益子駅舎と福祉施設で駅前整備
新市街地開発 都市デザインの潮流と展望
技術移転組織の現状と展開の方向
大阪湾における環境保全創造に向けて
中部地域の２１世紀の活路
標準設計と公共工事積算に係る課題の解決
デンマークの障害者にやさしいまちづくり
まちに時を刻む歴史の継承

問合せ先:大阪事務所 企画推進部 中村 孝子

おおやふれあい市民農園農事通信 No. 3

拝啓　収穫の秋　食欲の秋　いかがお過ごしでしょうか。先日、兵庫県大屋町の棚田*へ稲刈りに行きました。何せ潮の香りと米つぶを愛する私は、無農薬のご飯を口にしたく、稲刈りのお手伝いとなったのです。そのおすそ分けをお届けしたくて筆をとりました。

さて、米つぶは偉大だと思いませんか？主食になるかと思えば、お酒もお酢もおせんにもなるんですから。その米つぶを育てるお百姓さんはもっと偉い。そのお百姓さんを一喜一憂させるお天道様はかなりすごいよ。そんなすご者達に育てられた米つぶは粗末にできるはずがありません。お茶碗に残った、お弁当箱の蓋にくっついた、ご飯つぶはますます残せなくなりませんか？

そんな米つぶは、お天道様の汗とお百姓さんの汗を象ってあんな形をしているのでしょうか？ご飯つぶを口に運びながら、やはり米つぶが汗の形に思えてなりません。

陽を浴び、風に揺れ、水音をＢＧＭにして実った無農薬大屋米は、コシヒカリ、ササニシキに負けません！？右にご賞見あれ。

敬具

（中西　由起通信員）

汗を象った稲穂と兵庫県豊岡産の柳ごうりのお弁当箱に入ったおにぎり

右が当棚田のオーナー、後方が今年の収穫

棚田の礎となっている蛇紋岩。大屋米は蛇紋岩のミネラルを豊富に含んでいる。

※：大屋振興公社は棚田オーナー制度を設けて、指導員の下、近郊都市からのオーナーが田植えから稲刈りまでを体験し、楽しむ。作業後、ペンション翡翠のお風呂につかれるのも楽しみのひとつ。

新刊旧刊書評紹介

ディヴッド・G・ストーク編（日暮雅通・監訳）　早川書房：1997年7月

『ＨＡＬ伝説－2001年コンピュータの夢と現実』

紹介　武田　宏

ＨＡＬとは映画「2001年宇宙の旅」に登場する、自分で考えることができるＡＩ（人工知能）を備えたコンピュータです。

1968年に制作されたこの映画は、ＳＦでありながら、2001年の世界を可能な限り緻密な技術考証に基づいて構築したとされています。

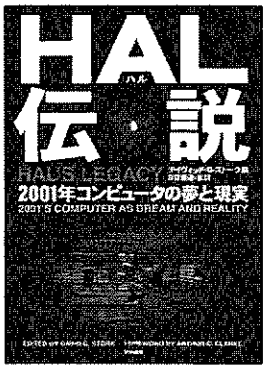
映画に登場する技術のうち、人工冬眠装置など、2001年までに到底完成し得ないことが明白なものはともかく、映画の主人公の一人であるＨＡＬ自身が、まだまだ夢のマシンであることを実証しているのがこの本です。

コンピュータの業界には「ムーアの法則」というものがあるそうです。曰く「半導体の集積度は18ヶ月で倍になる」というもので、単純に考えればコンピュータの性能が３年で４倍になることを表しています。実際にここ十数年間もこの法則は守られ続けており、これを超えるペースで進化をしてきている例もあるようです。また、コンピュータによる画像認識、音声認識といった要素技術はＨＡＬに近づくレベルに到達しているようです。

ではなぜＨＡＬは実現できないのかと考えると、それはこの映画製作に関わった人々をはじめ、60年代当時の人々が、ＡＩ、つまり人間の思考過程を過小評価していたということが考えられます。

家電製品やＰＣソフトのキャッチフレーズとしてＡＩという言葉が連呼された結果、この言葉自体にある種のインチキ臭さが漂ってしまいましたが、実際、ＡＩの実現は遙か彼方にあるようです。

コンピュータが「プランニング・判断」するには大変な労力を要するということが明らかになりつつあると、この本では最近の研究成果を紹介しています。例えば、コンピュータにブロックを指定した順番に積み上げる作業をやらせるには、ブロックが最初にどんな状態で置いてあるかということから、ブロック同士の摩擦、積み上げる途中で落下する可能性など「ラプラスの魔」的な初期条件のインプットが必要となるそうです。



人間は、不十分な情報からでも、過去の経験や周囲の状況などを勘案して、より適切な判断をすることができますから、その点では非常にインテリジェンスな判断システムを持っているといえます。

もちろん人間は間違いをおかしますが、人間同士が互いにそのことを認識しているが故に、それが大事につながることは希有です。

「コンピュータは絶対に間違いをおかさない」というのはＨＡＬの大前提であったのですが、この条件のもとで、ＨＡＬは殺人にまで及んでしまいます。

生活のあらゆる面に浸透してきたコンピュータですが、彼らが「ほどよい間違い」をおかすまでは、人間がＡＩの登場におびえることもなさそうです。

（大阪事務所　たけだ　ひろし）

まちかど

地域資源を活用した倉吉のまちづくり

三木　健治

三本松の松原に舞い下りた天女が、漁夫に羽衣を奪われそうになるが、哀願して返してもらい、天に上っていくという羽衣伝説は、全国いたるところで語り継がれています。

鳥取県倉吉市にも羽衣伝説が伝えられていますが、当地の伝説は一風変わっています。水浴びに山のふもとに舞い下りた天女が、農夫に羽衣を奪われ、その農夫と結婚して二人の子供をもうけるのですが、後年、羽衣を探し出し天に帰ってゆきます。残された子供は悲しみ、山に上って、母が好んだ鼓を打ち、笛吹いて母を呼んだというものです。このことからその山は、『打吹山（うちぶきやま）』と呼ばれるようになりました。その『打吹山』のふもとで、現在、地元有志の方が中心となって、地域資源を活用したまちづくりを展開しています。

この地域は、古くから城下町としてひらけ、現在も、幅二間ほどのせせらぎに沿って白壁土蔵群が立ち並んでします。また、まちの随所に古い商家が残っており、その街並みに当時の面影をみることができます。その街並みの修景を行うとともに、3ヶ所の土蔵を改修して、土産品、手作り品、地ビールの販売、またイタリアンレストランや郷土玩具の「はこた人形」の工房など多彩なお店が入居した店舗として再生しています。これらの店舗は、地域イメージを創り出している赤い瓦から「赤瓦」と呼ばれています。

倉吉市のまわりには、三朝温泉など多くの観光地がありますが、それまで多くの観光客は倉吉市を素通りするだけでした。しかし、現在、この街並みと、もてなしを楽しもうと多くの人が訪れるようになってきています。現在、全国各地で中心市街地の活性化に向け様々な取り組みが行われようとしていますが、地域がその地域の持っているものを十分に把握することが重要だと倉吉は教えてくれているようです。

さて、倉吉の方は、今度、どのような鼓や笛を打ち鳴らすのでしょうか。

（京都事務所　みき　けんじ）

玉川沿いに並ぶ白壁土蔵群

元醤油蔵で展開されるイタリアンレストラン

アルパック (株)地域計画建築研究所

- 本　　社
- 京都事務所　〒600-8007京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F／TEL(075)221-5132　FAX(075)256-1764
- 大阪事務所　〒540-0001大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F／TEL(06)942-5732　FAX(06)941-7478
- 名古屋事務所　〒460-0008名古屋市中区栄3-18-1・ナディアパークビジネスセンタービル13F／TEL(052)265-2401　FAX(052)249-3925
- 東京事務所　〒160-0022東京都新宿区新宿2-5-16・霞ビル401／TEL(03)3226-9130　FAX(03)3226-9560
- 九州事務所　(株)九州地域計画研究所　〒810-0001福岡市中央区天神1-15-35・ホンダハピエ5F／TEL(092)731-7671　FAX(092)731-7673